

特集

「対話的な学び」 を考える

「対話的な学び」は、これからの子どもたちの学びにおいて、大切なキーワードになります。では、道徳科の学びの中に、「対話」という営みをどのように取り入れていけばよいのでしょうか。その考え方と実践のためのヒントを特集します。

50年前、アマゾン川の最上流をゴムボートで下っていた。

日も沈みかけた頃、泊まれそうなところを探していると、青年一人と子どもたち数人が、珍しそうにこちらを眺めていた。私は、ここに泊めてくれるかどうかを尋ねてみた。スペイン語はわからないようなので、ジェスチャーで訴えた。最初のうちは、あまりいい顔をしなかったが、とにかく許可は下り、村に案内された。

人影は少なかった。一角で、女たちがたむろしていた。そのうちで最年長と思われる女に、ザックの中から取り出したマッチと小さな鏡を手渡そうとすると、全然受け取ろうとしなかった。受け取ろうとしないどころか、じっとうつむいて黙ったまま、私の方を振り向こうともしない。

[エッセイ]

言葉以前の対話

関野吉晴 (探検家・医師)

Yoshiharu Sekino

私は指定された小屋に案内され、そこにザックを置いて座った。村の人たちは皆、私には近寄ろうとはしなかった。子どもたちも遠くから私を見つめるだけ。一人で遠くから皆に観察されているのは、とても寂しい。また、物を与えれば、何でも喜んで受け取り、それによって仲良くなれるだろうと思っていた自分のさもしい心を彼らにのぞかれたようで、恥ずかしかった。

日も沈み、暗くなり始めた。相変わらず彼らは近寄ってこない。そのうちに狩りに行っていた者も帰ってきた。彼らも近づこうとはしなかった。炬を取り囲み、みんなが私の方を見ていた。集団の中で孤立したときの、なんと寂しいことだろうか。こんなことなら、いっそ一人で露營すればよかったと思った。そのほうが、よっぽど寂しさは感じない。

そのうえ、私の一挙一動が彼らに注目されているのが、とてもつらく窮屈だった。私はふてくされて、星を見ながら、大声で日本の歌をうたい始めた。そして、しばらくうたっていると、奇妙なことが起こった。子どもたちが恐る恐る寄ってきて、私の前にきちんと座り、私の後について歌をうたい始めたのだ。

私にとっては、まったく意外な出来事だった。私は彼らの歓心を買うためにうたい始めたのではなかった。

彼らは一所懸命にうたった。日本の歌を覚えたいのだろうか。私が一小節をうたい終わると、彼らはそれを繰り返した。まるで輪唱しているようだった。

そのうちに大人たちも近寄ってきた。そして、マッチと鏡を受け取るのを拒んだ女性が、タニシを大きくしたような巻き貝を15個ほど持ってきて、私の前にさっと出してくれた。ツブ貝のような味がするが、それより臭みがあった。5、6個食べて、残りを前に出すと子どもたちの手がすーっと伸びてきて、たちまちのうちになくなってしまった。彼らにとっては、相当の御馳走だったのだろう。

再び歌をうたい始めた。目頭がじーんと熱くなってくるのを感じた。物を与えることによってではなく、歌によって彼らと心が通じ合ったのがひどくうれしかった。その晩、輪唱はかなり遅くまで続いた。

人類の歴史700万年の中で言葉を使うようになったのは、たかだか7万年前といわれている。ゴリラ研究者の山極寿一さんは、「ゴリラは言葉をもちませんが、

いろいろな方法で気持ちを伝え合っています。表情や歌が、ゴリラにとっての表現方法です。言葉はなくても歌があるから、ゴリラはまとまりのよい集団を形成できているのです」という。幼い乳児は言葉で表現できず、ひたすら泣き叫ぶ。母親は子守唄で、乳児をあやす。

人間は他の霊長類にはない特徴をもっている。顔の表情筋の多さと、白眼だ。対面して話す人間は、言葉とともに、目の動きと表情も重要な表現手段なのだ。

人間はこのような言葉以外にも、多彩な対話能力をもっているといえるようだ。

関野吉晴 ● せきのよしはる

1949年東京都生まれ。一橋大学在学中から、南米への旅を続け、1993年からは、人類が拡散したルートを自らの脚力と腕力だけを頼りに遡行する「グレートジャーニー」をスタート。アメリカ大陸から、ユーラシア大陸を経て、アフリカへ、約5万3千キロの道のりを10年かけて辿った。著書に、『グレートジャーニー——地球を這う(1)(2) Kindle版』(筑摩書房)など多数。



「グレートジャーニー」に挑戦している頃の筆者。